

## 第三屆全國研究生研習營 人文與社會科學對話的日本研究



為培育新世代日本研究學者，日本研究中心於2016年6月18日假台灣大學文學院會議室舉辦第三屆研究生研習營，邀請四位優秀學者與有志日本研究的年輕學子進行交流。開幕式由日本研究中心主任徐興慶教授主持，致詞中希望各位年輕學子在獲得研究知識的同時，也要與中心進行更為緊密的橫向合作，讓今後的日本區域研究能夠更進一步的發展。

日本研究センターは2016年6月18日、台湾大学文学院会議室にて「第3回大学院生ワークショップ」を開催した。本ワークショップは若手日本研究者の育成を目的としており、各分野で活躍されている4名の先生方をお招きし、日本研究を志す学生との交流の機会を提供した。開会式では日本研究センターの徐興慶主任より、「学生のみなさんには、今日のワークショップで知識を得る



▲中心主任徐興慶教授致詞

だけでなく、今後はセンターとより緊密な連携を進めていってもらい、ここから日本地域研究がさらに発展していくことになれば」と挨拶があった。

# NTUCJS WORKSHOP

國立臺灣大學日本研究中心  
第三屆全國研究生研習營  
人文與社會科學對話的日本研究

NO.3

第一場	政治領域 9:00-10:05	主講人：山室信一（京都大學人文科學研究所教授） 講題：日本における立憲主義—その歴史と現況
第二場	文化領域 10:15-11:20	主講人：劉建輝（國際日本文化研究中心教授） 講題：日中二百年—相互交錯の近代
第三場	宗教領域 11:20-12:25	主講人：佐藤弘夫（東北大學文學研究科教授） 講題：幽霊の発生—怪談から見直す日本文化論
第四場	文學領域 13:25-14:30	主講人：太田登（日本天理大學名譽教授） 講題：和歌文學における〈見立て〉

時間：2016年6月18日（六）8：40 歡迎入場  
地點：國立臺灣大學 文學院會議室

〒10617 臺北市大安區羅斯福路四段一號 臺大日本研究中心  
TEL:(02)3366-9678 FAX:(02)3366-2785 E-mail:ntucjs@ntu.edu.tw  
其他活動資訊 歡迎至中心網站 <http://cjs.ntu.edu.tw> 查詢

# 第三回全国大学院生ワークショップ 人文と社会科学の対話の日本研究

2016.06.18

14

## 第一場 / 第1セッション 政治領域

主講人 / 講演者：

山室信一（京都大學人文科學研究所教授）

講題 / テーマ：

日本における立憲主義—その歴史と現況



▲山室信一教授

### 課程摘要：

立憲主義對國家而言，旨在消除國家行為的失控和風險，維持民主主義的平衡。可細分為「人權的保障」和「權力分立」兩重點，以下將觀察各個時代的立憲主義：

#### ★明治時代的立憲主義

- 作為憲法制定基礎的五條御誓文
- 主張「憲法上應明記權力分立和人權的保障」的伊藤博文，以及主張「不需明記」的森有禮二者間的對立

#### ★大正時代的憲政

- 大正政變和民主
- 吉野作造「憲政の本義」與民本主義
- 護憲三派「憲政的常規」要求和政黨內閣制

### 概要：

立憲主義は国家にとって、主に国家行為の暴走や危険性を排除し、民主主義の平衡を維持してくれるものであるが、最も重要なポイントは、「人權の保障」と「權力分立」の2つである。以下、時代ごとの立憲主義について見ていく。

#### ★明治時代の立憲主義

- 五か条の御誓文を基盤として憲法制定
- 「權力分立と人權の保障を憲法に明記すべき」と主張する伊藤博文と、「明記の必要なし」とする森有礼の対立

#### ★大正時代の立憲主義

- 大正政変とデモクラシー
- 吉野作造「憲政の本義」と民本主義
- 護憲三派「憲政の常道」要求と政党内閣制

# 第三屆全國研究生研習營 人文與社會科學對話的日本研究

15

## ★昭和—戰前・戰中期的立憲主義

- 天皇機關說事件和國體明徴運動
- 皇民化運動、徴兵與選舉權擴大

## ★昭和—戰後的立憲主義

- 日本憲法的制定與國民主義
- 修憲與護憲的角逐

## ★現狀—立憲主義的歧路

- 集體自衛權與集體安全保障
- 修憲與 2016 年 7 月參議院選舉

## ★國際和平構築與東亞

- 從「國家的安全保障」到「人民的安全保障」
- 「積極的和平主義」和「結構性的暴力」
- 東南亞友好合作條約

## ★昭和—戰前・戰中期的立憲主義

- 天皇機關說事件と国体明徴運動
- 皇民化運動、徴兵と選挙権拡大

## ★昭和—戰後の立憲主義

- 日本国憲法の制定と国民主義
- 改憲と護憲の角逐

## ★現況—立憲主義の歧路

- 集団的自衛権と集団安全保障
- 憲法改正と 2016 年 7 月参議院選挙

## ★國際平和構築と東アジア

- 「国家の安全保障」から「人間の安全保障」へ
- 「積極的の平和主義」と「構造的暴力」
- 東南アジア友好協力条約

## 第二場 / 第 2 セッション 文化領域

### 主講人 / 講演者：

劉建輝（國際日本文化研究センター教授）

### 講題 / テーマ：

日中兩百年—相互交錯的近代



▲劉建輝教授

### 課程摘要：

近代的東亞是在相互借鑑・支撐下進行各自的文化轉型。本次課程便以近代兩

### 概要：

近代の東アジアでは、互いを手本とし、支えあっていく中で、それぞれの文化変容が生

# 第三回全国大学院生ワークショップ 人文と社会科学の対話の日本研究

2016.06.18

16



百年的概念、語言、文學、旅行（移動）、文化（都市空間）來試圖重構中日文學與文化的歷史。

1810年代是近代的開端，廣州十三行的出現，代表了自由貿易體制的滲入。而基督教新教爲了傳教而編寫的媒材也從中國流傳到了日本，影響近代日語的形成。明治時代重新採用的漢文體，因爲在敘事上、造語能力上有著比傳統日文優秀的特點，是當時中國知識分子吸收西洋新知的來源，而這種漢文體也讓梁啓超能夠迅速地將日本國內的新知介紹給中國。由此例我們了解到，在概念與語言的交流上，中日雙方互爲彼此文化建構之契機，同時並具有借助他者的自我變革性。另外，東亞也在這時開始建立國民認同，日本透過對中韓的異化建立起“日本”的國家意識。但中國也從日本學習到了國民思想改造的重要性，例如梁啓超便借用了日本「太陽」雜誌對國家水準的評價，探討中國國民的

じた。近代の200年という概念、言語、文学、旅行（移動）、文化（都市空間）という観点から、日中の文学および文化の歴史の再構成を試みる。

1810年代は近代の始まりにあたり、廣州十三行の出現は、自由貿易体制の浸透を意味する。また、プロテスタントが布教のために編纂した紙媒体も、中国から日本に伝わり、近代日本語の形成に影響を及ぼした。明治時代には漢文体は、物語や造語の上で伝統的な日本語より優れていたため、当時の知識人層が西洋の新知識を得る文体となった。この漢文体によって、梁啓超は日本語で書かれた新知識をすばやく中国にもたらすことができたのである。日中の「概念」や「言語」の交流は、双方が互いに影響しあい、自己変革ができたのである。その他、この時期、国民意識が形成されるようになり、日本は中日韓に対する差別性を通して「日本」という国への国家意識を構築した。

しかし、中国も日本から、国民意識を修正する重要性を学んだ。例えば、梁啓超は日本の『太陽』という雑誌の国家水準への評価を例に、中国国民の弱さについて検討した。「文学」においては、梁啓超が小説を奨励したほか、周作人が内在概念を提起したことも近代の重要な変革の1つで、1820年代以降は、日本のプロレタリア文学の影響を受け、中国も無階級文学へと転向していった。

## 第三屆全國研究生研習營 人文與社會科學對話的日本研究

17

積弱之處。在文學上，除了梁啓超對小說的提倡之外，周作人對內在概念的提倡也是近代重要的變革之一，20年代之後，受到日本無產階級文學的影響，中國轉向至階級文學。從移動上，由於東北、滿洲國問題，使得日本希望盡量吸收內地人到滿洲旅行，日本便利用古典重新發掘了中國景點，中國近代景觀意識的形成受到日本很大的影響。在文化上，日本承襲俄國的設計，將都市廣場變成權力中心，形成一種文化象徵。可以看出東亞在接受西方思想時，社會都會出現對其侵略與啓蒙的拉扯，相較於日本的全面接受，中國則是在掙扎中前進。東亞內部的東方與西方，還有許多課題與可能性可以深入。

「移動」の面については、日本は東北・満洲国問題のために、内地人になるべく満洲旅行に行くようになればと、古典を利用して中国の景勝地を見出した。これによって、中国近代の景觀意識は、日本に大きく影響されることになった。また「文化」の上では、日本はロシアにならって都市広場を権力の中心とし、一種の文化的象徴を形成した。東アジアでは西洋思想受容に際し、それを西洋による「侵略」もしくは「啓蒙」という相反する評価を与えた。日本が全面的に受け入れたのと比べると、中国は自国文化との衝突のために、円滑にはいかなかった。東アジア内における「東」と「西」には、まだ多くの課題や可能性が残っているのである。

### 第三場 / 第3セッション 宗教領域

主講人 / 講演者：

佐藤弘夫（東北大学教授）

講題 / テーマ：

幽霊の発生—怪談から見直す日本文化論



▲佐藤弘夫教授

#### 課程摘要：

日本怪談有著相當悠久的傳統，我們耳熟能詳的幽靈怪談其實是在江戶時代才大量出現。幽靈的形成關乎到日本墓葬制

#### 概要：

日本の怪談話には長い歴史があるが、現在知られている話は、実は江戸時代に大量に出現した。幽霊の形成は、日本の墓および葬送

## 第三回全国大学院生ワークショップ 人文と社会科学の対話の日本研究

2016.06.18

18

度的變遷、靈魂觀的轉換，以及現世與他世觀的改變。

中世以前的墓葬制度與近世不同，中世的墓葬制度採取匿名制，“家”的制度也尚未確立，如果是一般平民的話，只能把屍體放在路旁再舉行簡單的供養。再加上中世認為佛祖會迎接死者到其他世界去，所以中世以前並沒有掃墓習慣。中世後期，人們開始希望靈魂可以留在現世，比起無法捉摸的他界，更希望能夠持續現世的生活。到了江戶時期，由於世道穩定和“家”觀念的確立，人們開始將死者埋葬在聽得到經文的寺院內，持續供養與造訪，除了將死者提升至祖先的高度之外，也是墳墓實名制的開始。可以說江戶時代將供養的主體從佛變成人，並以此與死者訂下不互相侵犯的契約，並要求生者要持續對死者的記憶。當生者破壞契約的時候，就是死者變成幽靈越界的開始。再加上沒有佛的救濟，導致江戶的幽靈傳說都必須要親自復仇之後才算完成。

雖然柳田國男曾說過自古以來的死者靈魂都留在我們身邊，但是從以上的探討，我們可以發現日本文化其實是持續變動的，這也為我們帶來重新從比較文化論・地域論檢討日本文化的可能性。



▲學生提問

儀禮の変遷や、靈魂觀の轉換、そして現世観・他界観の変化とかかわりがある。

中世以前の墓・葬送儀禮は近世とは異なり、墓に名前が刻まれることもなく、また家の制度も確立していなかったため、庶民層であれば、遺体は簡単な葬送儀禮を行った後、そのまま放置された。また、その頃は、先祖が死者の魂を迎えに来て他界に連れて行くと考えられていたこともあり、墓参りの習慣もなかった。中世後期になり、死者の魂は、リアリティのない他界ではなく、現世に留まり続けてほしいとの考えに変わっていった。そして江戶時代になると「家」の觀念が庶民層にまで広がり、読経の声が聞こえる寺の境内に墓地を作って死者を埋葬し、定期的に供養や墓参りを行った。死者を先祖の靈として祀ったり、墓に名前を記したりするようになったのも、この頃からである。江戶時代、供養の主体が仏から人へと移り変わったことで、生者と死者の相互不可侵の「契約」が結ばれ、また生

者が死者への記憶を持ち続けることがさだめられたのである。生者がこの「契約」を破った時、死者は生者との境界を越えて幽靈と化すが、近世の幽靈は仏の救済などは求めず、自ら生者へ復讐することを望んだ。江戶の幽靈話は、こうした死者の生者への復讐によって形成されたのである。

## 第三屆全國研究生研習營 人文與社會科學對話的日本研究

19



柳田国男は、古来より死者の靈魂はいつまでも身近な場所に留まっていると述べたが、実はこの靈魂観は、時代をこえて受け継がれた「日本的」な感性ではなく、時代によって変化していた。これも、比較文化論や地域論的な観点から日本文化について考える、新たな可能性のある論点である。

### 第四場 / 第4セッション 文學領域

主講人 / 講演者：

太田登（天理大學名譽教授兼台灣大學日本研究中心執行委員）

講題 / テーマ：

和歌文学における「見立て」



▲太田登教授

#### 課程摘要：

「見立て」就有如包巾一樣，能夠比喻・象徵任何東西。看不到的內在要如何用外在表象來說明，關乎語詞、心境、形式等問題，也是和歌文學重要的一環。在此以「月」的比喻來探討和歌的「見立て」。

精選和歌名作編輯而成的『百人一首』中，關於「月」的和歌共計十二首。透過月亮的比喻，有寄託思鄉之情的，也有歌詠悲戀、孤獨等等的各種情境，百人一首中出現的「月」，結合了人情與風景，是提升美意

#### 概要：

「見立て」は、風呂敷がどんなものでも包めるのと同様に、あらゆるものをたとえることができる。目に見えない内的なものを、どのような可視的表象を用いて説明するかは、ことばや心境、形式といった問題に関わってくるほか、和歌文学の重要な要素でもある。講演では、「月」の比喻を素材として和歌の「見立て」について考える。

和歌の秀歌を精選した「百人一首」の中で、「月」に関する和歌は12首あり、月の比喻に故

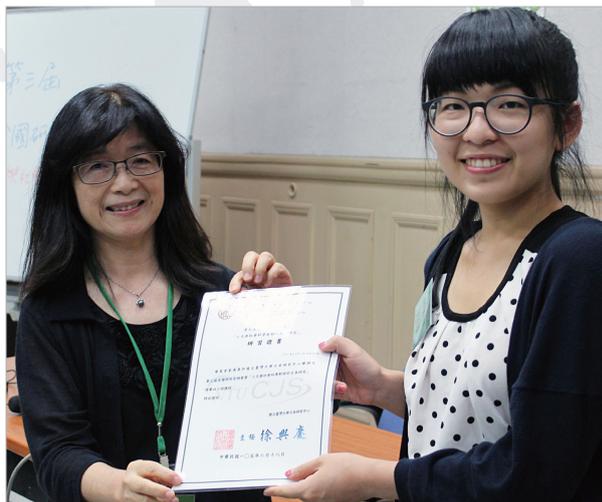
# 第三回全国大学院生ワークショップ 人文と社会科学の対話の日本研究

2016.06.18

20



▲結業學生獲頒研習證書



識與情緒的重要意象，「見立て」在和歌裡的重要性不言而喻。漢詩中也有許多利用到此技法的詩句，例如杜甫的「旅夜書懷」中有「月湧大江流」；李賀的「夢天」也有「老兔寒蟾泣天色」，都是用比喻手法來以景敘情的詩句。



▲學生提問

不僅是古典和歌，在近代詩歌中也承續了「見立て」的技法，像是啄木的『一握之砂』第384首中也有將冰雪歌詠為釧路冬月的短歌。從平安時代到中世，日本的「月」逐漸成為「雪月花」「花鳥風月」的題詠題材，「見立て」的意趣越來越強。雖然呈現出日本獨特的風雅、美意識，但其中其實也採借了中國詩人的表現手法，可說有著千變萬化的面貌。◆

郷への想いや、悲恋や孤独といったさまざまな感情を託している。百人一首における「月」は、人の感情と風景とが結びついたものであり、美的感性や情緒を高揚させる重要な役割を担っている。このことから、和歌における「見立て」の重要性がわかるだろう。漢詩でも、多くの詩句でこの技法が使われており、例を挙げると、杜甫の「旅夜書懷」では「月湧大江流」、李賀の「夢天」では「老兔寒蟾泣天色」といったように、比喻の形で情景が表現されている。

「見立て」の技法は古典和歌だけでなく、近代詩歌にも受け継がれている。例えば石川啄木の『一握の砂』第384首では、氷が釧路の冬の月に例えられている。平安時代から中世にかけて、日本の「月」はしだいに「雪月花」や「花鳥風月」の題詠となり、「見立て」という趣向が強まるようになる。日本独特の風雅や美意識であるともみなされるが、実は中国詩人の表現世界を取り入れており、多様な形があると言える。◆